



私も「小さな波」となって

宮城県代表

みやぎけん けせんぬましりつけせんぬま

宮城県気仙沼市立気仙沼中学校3年

しだ ひかり
志田 晶

晶、あなたにぴったりな役があるんだけど。」昨年、私は気仙沼演劇塾うを座でお世話になっている鎌田先生から誘われて、「ケアウェーブ」というミュージカルに出演しました。

ケアウェーブは、鎌田先生がたった1人で立ち上げた、チャリティを目的とした舞台です。先生は、阪神大震災で自分が何の役にも立てなかったことを嘆き、そのことをきっかけに「舞台の振付家という自分の仕事を通して、地球上のさまざまな問題をみんなに伝えよう」と考えたそうです。

公演のテーマはアフリカ。この大陸は、人類発祥の地であり、豊かな自然と文化をもちながら、貧困や内戦、マラリアやエイズの蔓延など、多くの問題を抱えているのです。

私は、病気の妹を病院に連れて行く、アフリカの少女の役でした。「お願いします。薬を、薬を下さい。」そう訴えても、病院には薬がほとんどなく、医者は頭を抱え、患者の母親たちは絶望で泣き叫ぶことしかできません。とうとう妹も命を落としてしまうのです。日本円にしてたった数十円の薬も、貧困ゆえに買うことが出来ない現実。台本を読みながら私は涙が溢れて止まりませんでした。

そして、自分たちとあまりにもかけ離れた悲惨な状況をどのように演じれば良いか分からなくなりました。すると先生から、「同情しちゃだめ。アフリカ人になりきりなさい。」と言われたのです。そこで私は、少女がどんな思いで妹を病院につれていったのかを何度もイメージしてみました。そして、中1の時、先生に薦められ「生かされて」という小説を読んだことを思い出しました。

それは、アフリカのルワンダで起きた部族間の争いによる百万人もの大虐殺で、家族全員を殺されながら、強く生き抜いた女性の自伝でした。あの女性も私の演じる少女も、

自分に与えられた環境の中で必死に生きていました。彼らが求めていたのは同情ではなく、問題を解決し現実を変えていく何かだったのだと思いました。私は、ケアウェーブの目的である「地球上のさまざまな問題をありのまま伝え、見た人の心にウェーブ=波を起こし、それぞれの波が集まって大きな波になるように」という一節をもう一度かみしめました。この世には想像もつかないほど悲惨な状況で精一杯生きている人達がいるのです。私もこの舞台上がらなければアフリカの現実に目を向けることはなかったでしょう。この役を通して1人でも多くの人にこの問題を伝え、その心に波が起きることを祈り、少女になりきるよう心がけました。

舞台が終了した後、観客の涙を見た時「ああ、伝わった。」という嬉しさとともに、私の中にも1つの波が生まれていました。それは、私もアフリカのために役に立ちたいという思いです。しかし、私にできることはと考えた時、思いつくのは募金ぐらい。それも意味のあることですが、私はもっとしっかりアフリカと向き合いたいと思いました。

私の願い、それは医者となり、医者や薬が不足しているアフリカの地で、少しでも多くの命を救いたいということです。幼い頃から父のように医者となって人の役に立ちたいと思ってきました。その夢が、アフリカと繋がりました。遠い外国の事とあきらめてしまうのは簡単です。でも、鎌田先生のようにあきらめずに行動し続ければ、きっと道は開けるはず。その思いが私を支えています。

世界中のさまざまな問題は、同情だけでは解決できません。「私も小さな波となって、努力して自分を磨き、1人でも多くのアフリカ人が健康と笑顔を取り戻せるようにしたい。」そう、願っています。